

あとがき

近年流木は、災害の元凶として取り上げられるだけでなく、環境に与える影響を評価する声が高まっている。このような研究が増えてきた理由として、砂防事業がある程度行き渡った感が国民の間に広まり、人々の関心が災害を乗り越え自然を見つめ直す余裕を持つようになってきたためであろう。しかし土石流・流木災害危険渓流流域の住民は、まだ安心して生活できる場を確保できているわけではない。1999年6月の広島における流木災害のように流木は突然人々を襲い、問題の大きさを再認識させられた。

現在日本に設置されている流木対策施設はほとんどが九州北部に集中しており、まだ人々に馴染みが薄いものと思われる。流木対策施設は鋼製構造物が中心であり、これが全国の流木災害危険渓流に設置されると、その景観及び環境に与える影響など人々の反応も様々であろう。流木だけでなく自然災害すべてについて、安全性をどこまで求め、どこで妥協して別の方法を探すのか、流域住民と行政側が十分話しあっておく必要性を感じる。

本論文の成果が、自然及び既設砂防ダムを利用した有効な流木対策に利用できればこの上ない喜びである。